## 今年は「国際家族農業年」

今までも国連が制定する「国際〇〇年」には、国際婦人年(1975) 国際児童年(1979) などが知られています。毎年、国連総会で採択・決議され、重点的に国連や国や個人に問題解決を呼びかける「国際年」。近いところでは、「国際水協力年」(2013) がありますが、「国際ゴリラ年」(2009) というのもありましたね。来年は「国際土壌年」です。

## 国際農業年とは

これまでの世界の農業政策を支えてきた考え方は、小規模・家族農業は自然 に消えゆくものだから、そこに予算を投入しても意味がない、限られた国家財 政の中で支援すべきは効率的な大規模農業だという考え方でした。

ところが、世界的に大規模農業を支援して市場の自由化を進めてきた結果、 社会全体は豊かにはならず、むしろ格差が開いて来てしまいました。貧困・栄 養不足の人口が増え、食料の安全保障もままならない。大規模農業による環境 汚染、資源の枯渇も深刻化してきました。

この矛盾が誰の目にも明らかになったのが 2007~08 年に発生した食糧危機でした。このままでは 2015 年までに世界の飢餓人口、貧困の撲滅・緩和という国連のミレニアム開発目標が達成できないことが明らかになったのです。

## 見直される小規模・家族農業

食糧危機を受けて国連で食糧安全保障の対策が求められ、検討されるようになりました。その中で、大規模、輸出指向型農業の問題が指摘される一方、小規模・家族農業が果たす役割が再評価されるようになったのです。

実は世界の圧倒的多数(8割)が小規模・家族経営です。大規模農業が大きな割合を占める南北アメリカ大陸やオーストラリアは世界からみるとむしろ例外なのです。

小規模・家族農業では効率が悪いと 思われがちですが、実際には単位面積 当たりの収穫量は大規模経営よりも多 いことが分かってきました。また、気 候変動が激しくなる中で、自然災害や 資材の価格高騰などの外的ショックに 強いことも見直されてきています。

